

近代短歌に現われた子ども（二十五）

大塚 雅彦



（46） 死刑囚の歌

死刑については最近その廃止論などをめぐって色々と論が多い。夙に死刑廃止論者として知られた故正木亮博士の著『死刑』（昭39・12）には「消えゆく最後の野蠻」という副題がついている程である。西側先進国で死刑を存続させている国は次第に少数になっているが、わが国では未だ廃止は時期尚早とする世論が強いようである。わが国で戦後、刑を執行された死刑囚は六百人近いが、最近、死刑確定者の再審開始が相次ぎ、免田事件・財田川事件・松山事件などがあらためて無罪となり、誤判のおそろしさを国民に強く認識させるに至っており、死刑制度の問題は文明的な考察を背景にして一層人々の関心を惹き続けるのである

う。

死刑を論じたり死刑囚を紹介したりする書物や、死刑囚自身の手記等も、最近では公刊されるものが少なくない。例えば、精神医学者であり作家でもある加賀乙彦の『死刑囚の記録』（昭55・1）は、著者が直接に会い、

話をし、観察し、交際した何人かの死刑囚について述べているが、これは彼が『宣告』（昭54・2）に於て小説のかたちで死刑囚を描いたのと異り、そのような仮構のかたちでなく「死刑囚がどのような生活を送っているか」という事実を報告しておく義務をおぼえ」（あとがき）で刊行したものである。また、高橋良雄の『鉄窓の花びら——死刑囚へのレクイエム』（昭58・3）は、拘留所長や矯正管区長などもやり刑務官生活の長かった著者が、死刑囚のノートや遺書をもとに何人かの死刑囚の実態を描いており、感動的である。処刑される者への永劫の別れを意味する臨時の「特別集会」や「お別れ俳句会」や「茶会」の模様の叙述などに私は強い関心をそそられたし、茶会に出た女性死刑囚（強盗殺人・放火犯）

の「食台に汗の指もて子の名書く」の俳句などにも心惹かれる。小鳥を愛して飼い、達筆で俳句や短歌を書きつける禿頭の老人死刑囚矢島新吾（強盗殺人犯）の様子なども生き活きと描かれている。

死刑囚の手記では、例えば正木亮・吉益脩夫編『正田昭——黙想ノート』（昭42・7）などがよく知られている。これは昭和二十八年夏、いわゆる「メッカ事件」を起した正田の思索ノートを紹介したものである。正田は慶大在学中から金銭濫費癖がつき、卒業後会社員となったが、他人から預かった株券を返還せず金融業者Hに依頼して売却し、売得金を遊興などに費消し、返済に困り、共犯者たちと共に東京・新橋のバー「メッカ」に於いて右のHを殺害する強盗殺人事件を起したのである。彼は犯行後も長い間罪の意識を欠き、真の悔悟が見られなかったが、その後、カトリックのカンドウ神父に出遭い、はじめて人間的に目ざめ、死刑を宣告された極限状態において、毎日読書と思索に専念し、神を求めて精進する間に書いたのが、この「黙想ノート」である。元来

すぐれた文才を有し、「群像」の新人賞に応募して同誌に作品が掲載されたこともあるが、明るくユーモアに富む性格で、また、「全生園」のハンセン氏病患者者に対して惜しみなく全力を尽して励ましの手紙を書き続けたりして、人々の心に深く印象をのこして絞首台にのぼっていった。加賀乙彦の前掲書『死刑囚の記録』の第六章にも正田のことは紹介されているが、彼の「ノート」は房内で書かれた死刑囚のすぐれた省察として、死刑囚の心理をよく示しているのである。

すぐれた短歌や俳句を遺した死刑囚もある。例えば『小鳥と手錠』『いのち重たき』の二冊の歌集をのこして刑死した大堀昭平のことは、かなりよく知られている。また、加賀乙彦の『死刑囚の記録』にも「横須賀線爆破事件」の犯人である若松善紀のことが書かれている。これは昭年四十三年六月、大船駅付近の踏切で横須賀線電車の網棚の荷物が爆発し、乗客一名が死亡、十数名が負傷した事件であり、犯人として二十五才の大工の若松が逮捕されたが、犯行の動機は、結婚する約束で同棲して

いた女性が他の男性と恋仲となったのを恨み、鬱憤を晴らそうとしたのである。死刑を宣告された若松は東京拘置所内でプロテスタントの牧師の教誨を受け次第に信仰に心を寄せ、またしきりに短歌を作った。加賀は前掲『宣告』（長篇小説）の中にも若松をモデルにした人物を登場させているし、また短篇小説を集めた『犯罪』の中でも「ある歌人の遺書」という一篇で、彼の処刑前後の模様や処刑直前の最後の手紙を紹介（高松育夫というペンネームになっている）している。若松は歌誌「潮音」（太田青丘主宰）に純多摩良樹のペンネームで短歌の投稿を続けていたもので、太田青丘はその著『太田水穂と潮音の流れ』（昭54）の中で若松の歌を、すぐれた作品として紹介している。但し、若松は独身であったから、子どもの歌はあまりないようである。

俳句では大阪で俳誌「大樹」を主宰し、大阪拘置所で「ひこばえ」と名づけた句会により死刑囚の俳句指導を続けた北山河と、その娘北さとの芸編に成る『処刑前夜』（昭35・2）がある。「死刑囚のうたえる」とい

う副題があるように「春浅し背すじの冷ゆる鍵の音」
「春風に光る手錠をかくすなし」等、すぐれた死刑囚の
句を多く紹介しているが、子どもを素材にした彼等の作
品にも次のような秀作がある。

子へ賀状 筆太く死を 偽りて

子の手紙 蠅といっしょに 読みました

しみじみと 子を思う掌の 桜んぼ

さて私は今、死刑囚歌人の二つの単独歌集をここに
りあげよう。

① 島秋人『遺愛集』

島秋人は本名中村覚、昭年九年生れで、満州で育つた。引揚後も母の病死、自分自身の病弱、周囲からの疎外等があったようで、転落生活が始まり、少年院にも入れられたが、昭和三十四年の雨の夜、飢えに堪えかねて

農家に押し入り二千円を奪い、争って家人を殺し、死刑囚となった。そして四十二年十一月、三十三才を一期として処刑されたのである。

彼は中学生の頃、凶工の教師吉田教諭にたった一度だけ褒められたことが忘れられず、獄中から手紙を出した。それが機縁で、吉田氏の夫人絢子から短歌の手ほどきを受け、忽ちに才能が開花し、「歌詠みて悟り得し今の愛しさは死刑あらねば知らざりし幸」と心境をうたう程、短歌にうち込むようになった。昭和三十八年には窪田空穂が選者をしていた毎日新聞の毎日歌壇賞を受けるに至った。これより先、アメリカの週刊誌「タイム」にも「彼の歌は、オスカー・ワイルドの叙事詩を追想させる」と紹介されたりしている。その三十七年には死刑確定したのであるが、その年に受洗もしている。三田高校に在学していた前坂和子（後に教師となる）から激励を受けて文通したり、信仰を持つ女性で、彼の遺体献納のために必要なので養母となってもらった千葉てる子や、盲目重病の人で手紙で彼と愛を誓いあった鈴木和子等、

彼を支えてくれた人が何人か居たようである、そして処刑前夜「この澄めるころ在るとは識らず来て刑死の明日に迫る夜温し」の透徹した心境の絶詠をのこして、絞首台に消えたのである。彼の「獄中生活と死」は多くの人々に深い感銘を与えたらしく、前掲高橋良雄『鉄窓の花びら』には十四頁にわたって「幽囚の歌人」として彼のことが述べられており、また、佐藤幸治（京大教授・心理学）著『死と生の記録』（昭43・3）にも、彼の短歌を多く引用しつつ、その「澄み渡った高い心境」に至った経過が語られている。

『遺愛集』は昭和四十二年、つまり処刑の年の十二月に刊行されている。窪田空穂の序文、秋人自身の「あとがき」、前述の前坂和子の「鳥秋人さんの想い出」という文、窪田章一郎（空穂令息）の「後記」等がある。歌集の題名は前坂和子が高校生の頃つけてくれたものを、前からきめていて名づけたものという。集中には多くの秀作があるが、ここではむしろ、子どもをうたったものを若干あげよう。むしろ、彼は千葉てる子に宛てた手紙の

中に書きつけた句「童貞に終るひとりに秋の風」の如く、結婚生活を経験しなかったから、自分の子ではない。

①眼をつむり にはかめくらとなりて聴く

ガラスを知らぬ盲ひし児の詩

②悔いに冴え 眠りそびれしわれの眼に

いたはる如く児童图画あり

③同囚の祈りむなしく幼児持つ

友の死刑は確定となる

④かなあみを叩き呼ぶ児に泣きながら

父となりるき若き死刑囚

⑤美しき靴のみ選りてかくすくせ

もてる園児は母亡き児なり

⑥ カリエスの孤児の少女のあみくれし
レースの花器しき許可にならざり

⑦ 独房もさかさに見ゆる児童画も

めづらしかりき寝ころびてゐて

⑧ 愛に飢うる小さき胸に菓子袋

ひとつづつたく孤児の一群

⑨ 双手振り 歩み初めし児を獄窓の

かなあみの目のひとつにみたり

⑩ 酒のみの父持ち貧しき姉弟の

誤字多き手紙を獄に愛しむ

⑪ 屋根少し濡れて夕づくひとときを

児のこゑ高く透りて聴ゆ

⑫ 獄外に子供神輿の行くらしく

笛と太鼓と聴えて楽し

①から④迄は昭和三十六年作で、この歌集は三十五年作から始まっているから、初期のものである。盲目の児の詩や児童画などに惹かれるのは、やはり肉親の愛に恵まれず育った薄倅の彼の境涯がそうさせるのであろう。

幼児をもつ若き死刑囚仲間を詠むのも、いかにも彼らしい。④の「父となりるき」というのは、「父らしい様子をあらわしていた」という意味であろうか？この歌の次に、島秋人自身が殺害した被害者の児に託びる作品も続いている。⑤はその前に「四歳のじゃんいちと云ふ児を知りぬ母亡き故に笑はぬとあり」という歌があり、また後の方に「容疑者とつめたき目もて視なざる母亡き幼児を獄に知りたり」というのもあるので、事情がわかる。⑥は獄内のきびしさを想わせる作品であり、この歌の「カリエスの孤児の少女」や⑧の「孤児の一群」や⑨の「歩み初めし児」や⑩の飲酒家の父を持つ「貧しき姉

弟」等をとらえて素材としているのも、彼の生い立ちから来る共感であると共に、自他のいのちをいとおしむ心情が彼の裡に深くなっているのを、推察できる。⑪⑫は昭和四十二年、つまり刑死した年の作品であるから、もう死の直前の心境といえる。近づく死を待ちながら、獄中の子どもの高く透る声にじっと耳を傾けたり、子どもみこしの賑やかな状景を想像して楽しんでゐる。驚くべき純粹な到達した高い境地であり、読者のわれわれがむしろ死刑囚の彼から深く教えられる思いがするのではなからうか。

⑭ 草川たかし『処刑待つ部屋』

この歌集は昭和四十五年一月に「新日本歌人協会」から発行された。同協会の幹部の渡辺順三、赤木健介両名の序文があり、著者自身の「あとがき」と、協会の機関誌「新日本歌人」で選歌を担当している森川平八の「解決にかえて」という文とがある。この歌集を私が持っているのは実は、この森川氏が直接に送って下さったのである。これらの人達の文章や草川の歌を読んでみると、

草川たかしは本名でなく筆名であること、昭和十年に東京の多摩川ベリの中農の家の生れであること、この歌集発行当時三十四才の死刑囚であること、東京拘留所にもう七年も在監していること、家には老いた父母と、妻と、幼児が居ること、赤木から歌の添削を受けたのが機縁で、その勧めで「新日本歌人」に参加し、もう四年くらいになるらしいこと、獄中で浄土真宗を帰依していること等々がわかる。但し殺人犯というだけで、犯行内容の詳しいことはわからない。渡辺は、島秋人や大堀昭平の歌集などに比しても「それらに伍して劣らないと思っている」と述べている。子どもが出てくる歌を若干抄出してみよう。

① 父親の記憶もたざるアルバムのも
わが子は無心に砂遊びする

② 人律に背き掛けられている手錠
吾子の瞳にうつることなかれ

③ 法律に背き死を待つ身となりて

ひそかに吾子に絵本を送る

④ 高塀を隔ててはずむ子どもら

声する方へ眼は向けて佇つ

⑤ 獄の夜に渦なして顛つこれの世に

ただひとりなる吾子の面影

⑥ 愛しさのつりくるなべ狂おしく

個室に吾子のアルバムひらく

⑦ 虚しかる愛かと思う許されて

絵本を購いぬ子に送るため

①と⑥はアルバムに撮っているわが子をうたったいる。子を思うとき⑥のように心狂うばかり恋しいのだが、また「処刑台に処理さるべきわがいのちひたにし

ずけし吾子の顛つとき」と、子どもを想いやつて心静かにしている折もあるようだ。③⑦のように、子どもにひそかに絵本を買って送ることもあるが、それもこんな土壇場になっての行為であつて「虚しかる愛」と自嘲するのだ。②のように手錠をかけられている自分の姿を子に見せたくない、という自責の念が起る。④の如く獄の塀の外からきこえる子どもらの声に心耳を澄ませて佇つ姿は、島秋人作品にもあつた。「遊ぶ子どもの声きけば、わが身さへこそゆるがなれ」という有名な『梁塵秘抄』のうたは、無心に遊ぶ子どもたちの声をきき、罪業深き遊女がおのが身を悔いているのだ、という一説があるのも、私には肯けるように思われる。殺人という大罪をおかした死刑囚が、わが子や他人の子を見たり、想いやつたりしていのちの深さを自覚するのは、子どもの姿が人間の原点を示すものであるからであらう。

(お茶の水女子大学)